

阿妻一直の『札幌焼・盤溪窯』 生い立ちの記

独立時代↓(盤溪)

一直焼・盤溪窯(その9)

前回は、穴窯の窯焚きを使用する薪の灰による自然釉の作品と、作品に直接釉薬をかけた(施釉)作品について説明しました。今回は、もう少し詳しく説明します。

先ずは自然釉ですが、作品が詰まってる窯の中の状態は、入口の付近は煙突に向かって約一畳半くらいのスペースを燃料の薪が大量に燃やす事が出来るように何も詰めずに空けておきます。

作品の詰め方は、そのスペースの後ろから積み上げていくのですが、窯詰め説明には専門用語の方がイメージしやすい場合があるので、専門用語を交えながら、説明を進めていきます。まず、穴窯の窯詰めには、「火前」

と「火裏」と呼ぶ用語があります。

火前は焚き口側の火の方向を向いているので火の前、略して火前と呼び、反対に煙突の方向に向いている面を【火裏】と呼びます。

作品を詰める際には私の窯の場合、煙突側の火裏から入口側の火前に向かって作品を詰めていきます。

穴窯の中では、入口側から煙突側に炎と煙の対流がおき、自然釉の灰は、火に近い火前には、灰が掛りやすく、火前から遠く離れる火裏には掛りづらくなり、また、焚き口に近い作品と、遠い煙突側との灰の掛る量に差が生じます。そのために、それぞれの作品に火前と火裏の二つの景色が出来ます、灰の掛った部分は釉薬の様な自然釉が掛り、灰の掛らない部分は、赤

から茶色の色になり、赤が鮮やかに出た場合には、【緋色】とも呼びます。

一つの作品に対し、火前・火裏と呼ぶのも、薪窯(穴窯)の特徴です。

窯詰め作品に対し、同じ大きさの作品を前と後ろに並べて置いた場合、煙突側の火裏には、灰が掛りづらくなります。

裏側の作品にも灰が掛る為には、火前の作品は、火裏よりも小さめの作品か細めの作品を並べます、そうする事により、火裏の作品には火前の作品が、灰の掛る妨げになり、影の様に同じ火前でも影が出来、一つの景色となります。

穴窯の窯詰めを行う時には、灰の掛り方・景色の付き方など、色々な想定を思い浮かべて、窯焚きの火の流れを想像しながら窯詰めを行います。陶芸の作業の中でも、楽しい作業工程の一つでもあります。

窯詰め作業が終わりますと、出口となっていました空間を閉じます。

レンガを一段一段積み上げて塞ぐ訳ですが、薪を投げ入れる(くべる)焚き口部分を、約30センチ角くらいの、真ん中くらいの焚きやすい位置を空けておき、他は塞いでしまいます。

さて、窯詰めを終えると、いよいよ窯焚きの作業となる訳ですが、皆さんは、窯に入ると、いきなり沢山の薪を、窯の中に投げ入れながら、猛々しく激しく勢いよく燃える炎を思い浮かべる派手なイメージをお持ちだと思えます。が、最初から勢いよく焚きますと、中に詰めた作品が割れてしまいます。この窯焚きにも、沢山のノウハウとテクニックがひそんでいます。

今回は窯焚きの説明と、それに伴って釉薬の説明に入りたいと思います、お楽しみに。